

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02252

研究課題名(和文) モダニティとニュートン主義 複数世界・知の科学化・ソーシャリティ・文明の再構築

研究課題名(英文) modernity and Newtonianism

研究代表者

長尾 伸一 (Nagao, Shinichi)

名古屋大学・経済学研究科・名誉教授

研究者番号：30207980

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ニュートン主義は固有の自然科学の領域を超えて、18世紀の知的世界を形作る一つの力として機能した。それは第1に、それが提示する、近代科学の数理的・実験的方法が、知識人による宗教的熱狂主義批判と結びつき、次第に公的言説圏で、経験と論理の言語のみで記述される「現実的なもの」の「文法」として働き始め、それによって「空想」から「現実」が明確に分岐し、そのうえで人間論と政治・経済・社会の見方、および技術と政策の言説が組み立てられるようになったという、知の科学化、第2に、無限宇宙の中の無数の世界というキャンパス上で、人間存在に知的生命としての普遍性を見ることを求めた天文学的複数性論の2点についてである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は現代思想の啓蒙批判にしばしばみられる、19世紀以後の通俗的な啓蒙像を排しつつ、申請者がかかわってきた東西18世紀の比較研究の成果を取り入れ、ヨーロッパの啓蒙の固有性を「知の科学化」に求め、人間の「二重のソーシャリティ」の把握が、社会科学の建設と、その視点からの文明の再構築へと展開したととらえ、それらに対する批判(反ニュートン主義)への言及によって、現代にまで継承された啓蒙の普遍性とその錯誤を同時に示す。その点で本研究は、歴史内在的な啓蒙研究の成果を踏まえながら、それを乗り越えようとする試みであり、その結果は、近代思想史に新しい遠近法をもたらすと予想される。

研究成果の概要(英文)：This project analysed the relationship between the Enlightenment and Newtonianism and clarified the following points, the scientification of knowledge and the concept of universal reason. Newtonianism was the first successful system of modern science that employed mathematico-experimental method. It functioned beyond the limit of science and contributed to the formation of 18th century intellectual world. Firstly, its mathematico-experimental method, combined with intellectuals' critic against "enthusiasm", gradually began to be the grammar of "reality" constructed only in terms of experience and logic. This caused the demarcation between "reality" and "imagination" and upon this ground, modern view of humanity and society, technology and policy were built. Secondly, based upon the view of astronomical plurality of worlds, universal mind was observed within human being.

研究分野：思想史

キーワード：思想史 科学史 ニュートン主義 啓蒙

## 1. 研究開始当初の背景

18世紀啓蒙が「ニュートンの時代」と呼ばれ、近代科学、とくにニュートン主義が思想・文化でも大きな意味を持ったことはよく知られている。しかしその点に焦点を当てたカッシーラー(『啓蒙の哲学』1932)、ラブジョイ(『存在の大いなる連鎖』1936)、ゲイ(『自由の科学』1969)などの記念碑的労作以後、1960年代からの啓蒙研究では、ハーシュマン、スタロバンスキー、エリアスなどの業績やフュレたちのフランス革命再考などを受けて、社交性(sociability)や商業社会論(commercial society)を軸としたり、社会史的、文化史的な面を資料的に解明するなど、多様性と歴史的文脈性を重視する議論が中心となってきた(ポーコック、ダートン、ベーカーなど)。それらは実証研究の深化によって、「モダニティの起源」という旧来の啓蒙理解を歴史内在的に訂正する点で、重要な達成といえる。他方で、J.プルーストラに始まり、主に近年日本18世紀学会が韓国学会との協同作業によって行ってきた、18世紀という同時代性の相の下で東西比較を行う研究の結果、この時代の東アジアとヨーロッパの知識・思想・文化には、程度の差はあれ、共通した動向がみられることが明らかになってきた。それらは技術的、科学的知識の共有と流通、社交性と趣味の洗練、公的言説圏の拡大、国境を越えた文芸共和国の成立などである。これらの現象は上述の欧米での文化史的、社会史的啓蒙研究の成果に対応している。

だが以上の諸研究の結果、なぜ19世紀以後に啓蒙がヨーロッパのグローバルな知的ヘゲモニーの基礎となったのか(科学、進歩、基本権、自由主義、社会主義)また現在でも思想的な衝動力を保っているのか(「コミュニケーション的合理性」ハーバーマス、「再帰的近代」ギデンズ)という問いに答えることは、むしろ困難となってきていた。一方、18世紀東西の同時代性の研究は、19世紀に工業化と科学技術の展開をもたらした、ヨーロッパ初期近代における知識の科学化が、ヨーロッパ近代の目立った特徴であることも示している。そのため以上の問いに答えるためには、ニュートン主義を中心に据え直して、啓蒙の再解釈を行う必要があった。

申請者は『ニュートン主義とスコットランド啓蒙』(2001)、『トマス・リード』(2005)や科研費助成研究において、経済学をはじめとする社会科学の形成との関連でニュートン主義が果たした役割を、(1)科学の方法と、そのヴィジュアル・イメージの拡散(2)懐疑主義と日常意識の点から明らかにした。また『複数世界の思想史』(2015)では、古代ギリシアに起源を持ち、後期スコラ学が発展させてきた複数世界論が、18世紀までの科学の形而上学的根底となり、それがニュートン主義の天文学的複数世界論へと展開したことを解明し、現在進行中の助成研究では、複数世界論の検討に続いて、社会体を構成する普遍的秩序や原初的正義の観念と知の科学化の関連を分析してきた。本研究はこれらを総合しつつ発展させ、新しい啓蒙像の構築を試みた。

## 2. 研究の目的

本研究は近代ヨーロッパ思想におけるニュートン主義の役割を、複数世界のヴィジョンと知の科学化にあると見て、それに基づき18世紀啓蒙思想を、人間存在に根源的な、社会的動物(zoon politikon)および知的生命(intelligent being)という二重のソーシャリティ(社会性)の理解を基とする、日常世界の視点からの文明の再構築(great instauration フランシス・ベーコン)の企てと捉え直すことを目的とした。これによって18世紀西洋に固有な、啓蒙の通時的(19世紀以後の西洋近代思想の展開との差異)、共時的(18世紀東アジアでの文化・科学、思想の発展との区別)個性を際立たせながら、現代なお継続する啓蒙の普遍主義的な影響力の根源と、今世紀にまで持ち越された課題を明確にし、近代思想史に一つの新しい展望を提供することをめざした。

## 3. 研究の方法

研究計画・方法(概要) 研究目的を達成するための研究計画・方法について、簡潔にまとめて記述してください。

本研究は社会思想史を中心に、近代思想史、社会科学史・近代科学史を総合する学際研究であり、東西比較も含め、内外の多分野の専門家と対話し、諸分野の研究成果を領域横断的に集約することを心がけた。本研究では電子データ・ベース(EEBO、ECCO等)による文献の全文検索を利用し、初期近代から19世紀までの関連した言説空間の復元を行うため、研究書の精査、刊本資料の読解と並び、国内外の電子データ・ベースの徹底活用を行った。現地調査では、通俗的著作家たちの未だ注目されていない刊本や科学者たちの書簡の分析、マニユスクリプトの形態をとる未公刊資料の発掘を行う。また文献実証にとどまらず理論的なアプローチも併用し、社会科学方法論、科学哲学、経済哲学、科学社会学、言語理論、認知心理学、社会理論などの積極的な援用を行った。

## 4. 研究成果

前述の方法本研究では以下の諸点について、啓蒙とニュートン主義の関係を把握することができた。

ニュートン主義は数理的・経験主義的方法に基づく近代科学の最初の成功した体系だったが、それに続く19世紀、20世紀の物理的科学とは異なり、固有の自然科学の領域を超えて、18世紀の知的世界を形作る一つの力として機能した。それは第1に、初期近代のベーコン主義や数理的学の展開を受けて成立したニュートン主義が提示する、近代科学の数理的・実験的方法が、知識人による宗教的熱狂主義批判と結びつき、次第に公的言説圏で、経験と論理の言語のみで記述される「現実的なもの」の「文法」として働き始め、それによって「空想」から「現実」が明確に分岐し、そのうえで人間論と政治・経済・社会の見方、および技術と政策の言説が組み立てられるようになったという、知の科学化、第2に、無限宇宙の中の無数の世界というキャンパスの上で、人間存在に知的生命としての普遍性を見ることを求めた天文学的複数性論の2点についてである。これらは18世紀の科学的言説に、以後の時代とは異なる固有の特徴を与えつつ、現代にいたる「啓蒙」の観念と、この世紀に創設された社会科学を特徴づけている。

以上の分析によって本研究では、西洋近代思想史に関する以下の6点の展望を得ることができた。前世紀の形而上学的思索を受け、啓蒙は社会的存在としての人間を、科学を範型に(1)二重のソーシャリティ(社会的動物と知的生命)から理解した。それは「社会的動物」としての経験的存在の面に加え、論理と数理という、神を含む全ての知性に普遍的に妥当する手段で、複数世界に多数存在する純粋な知的生命の一つとして人間を見ることであり、それが通常利己心と道徳法則の対立と叙述される、この時代の「人間本性論」の豊かな展開をもたらした。しかし人間存在に本源的な二つのソーシャリティからは、文明とその権力機構は導かれぬ。むしろその観念は、(2)知の科学化による、公的言説空間における「現実」の生成と結びついて、知的生命としての普遍的なあり方(自然的秩序)を内包する日常経験の世界(生活世界)と、王や神や想像上の富である貨幣が支える文明(システム)との対立の視点をもたらし、啓蒙に(3)日常世界の視線に基づく文明批判による、文明の再構築を企てさせた(啓蒙の未完のプロジェクト)。それは学問的には、(4)社会体の自然的秩序の観念の確立による社会科学の形成を促し、また(4)「精神の研究」と道徳的行為の原理の哲学的定式化による、時間的、空間的に普遍的な知的生命の理解を生み、現代世界を支配する人間主義と自由主義的社会理論に土台を提供した。しかしそれらは生物学におけるセントラル・ドグマの確立以前に試みられた人間の科学であるため、地上の社会の十分な説明原理を持たない普遍主義に終わり、それらを批判したヘーゲル派が(6)文明におけるSujet = 経験と論理を超えたゴーストの機能を指摘し、現代思想に道を開くこととなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長尾伸一
2. 発表標題 Ecological modernisation, ecological welfare and ecological civilisation
3. 学会等名 中国社会科学院国際フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shinichi Nagao (Session Organiser and proposal)
2. 発表標題 Asian Identities in the Global Enlightenment
3. 学会等名 ISECS Congress 2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長尾伸一
2. 発表標題 「複数世界論の普遍性、多様性と18世紀における機能」
3. 学会等名 日本18世紀学会大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 長尾伸一 監訳, 伊藤庄一 訳, ジョエル・モキミア著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 410
3. 書名 知識経済の形成 - 産業革命から情報化社会まで	

1. 著者名 長尾伸一・梅澤直樹・平野嘉孝・松嶋敦茂 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 現代経済学史の射程:パラダイムとウェルビーイング	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------